



いまさら訊けない! 水電解質異常の診かた, 考えかた

加藤 明彦, 安田日出夫編著. -- 中外医学社, 2018.

ISBN: 9784498123809

REVIEWER

医学部 医学科 5回生

教科書を捨てよ、実臨床へ出よう

この人は高Na血症です、あるいは低Na血症ですと言われた時にその人はどんな状態だと思いますか？「高Na血症はナトリウムの摂りすぎで低Na血症はナトリウムの摂取量が足りてない、に決まってるじゃん！」幸か不幸か人体はそこまで単純にはできていません。

「あ〜、何だっけ…。ナトリウムは腎臓の近位尿細管の何とかチャンネルで再吸収されて、そこがおかしくなるから腎不全？高Naと低Naどっちが腎不全なんだっけ？というか尿細管の輸送系ややこしすぎ！」気持ちはわかるけど、それじゃ大外れです。

「原因はさておき、輸液で補正すりゃOKでしょ！」問題を先送りにしただけです。

ここまでで少しでもドキッとした、あるいは不安が頭をかすめたのなら臨床へ出る前に本書を始めとした電解質異常についての書籍に目を通した方がいいかもしれない。というのも、殆どの診療現場では採血およびその評価という医行為は行われる。その中で全ての採血において測定される項目の一つが電解質であるにも関わらず、実臨床において行う機会のほどには座学での学習機会は多くはなく、実践の中で学ばざるをえないのが実情である。

本書はまず症例提示が行われ、その後に鑑別、治療法、病態の解説という構成になっている。どの症例も特に内科では出会うかもしれないと思わされるものであり、実践的であることが強く志向されている。冒頭のNaの例で言えば、摂取量や、単純な腎機能障害で問題となるよりも、(広義の)内分泌領域に問題があることが多いことを追体験できるようになっている。

(裏へ続きます)

493

12

Ka 86

医図開架

⇒⇒⇒

一つ惜しむらくは、数ページ程度でも冒頭もしくは巻末に、電解質毎に診断フローチャートや鑑別リストの形でまとめたものがあればよかった。

臨床の現場に出る直前に読んでおきたい一冊であると言える。

受理：2019-03-11